

大
業
書

（註）米價に騰踊すハ小麦ノ騰踊ヲセサキニ目テ穀貴ニ導カレトヘシ、
麥ノ騰ニ伴テトコノ事南ノハ騰メ騰カレトヘシ。



昭和八年十二月

原蠶種國家管理ノ概要

農林省蠶絲局

- 一、原蠶種國家管理問題ノ經過
- 二、原蠶種國家管理ノ必要トスル理由
- 三、原蠶種國家管理ノ蠶絲業ニ及ボス效果
- 四、原蠶種國家管理計畫ノ概要
- 五、蠶種ニ關スル統計

原蠶種國家管理ノ概要

一、原蠶種國家管理問題ノ經過

我國ニ於ケル蠶絲業ノ異常ナル發達ハ一面ニ於テ蠶品種ノ雜駁ヲ招來シ其ノ弊年ト共ニ加ハルノ狀勢ナリシヲ以テ明治四十三年農商務省ニ開催セラレタル生産調査會ニ於テハ繭質統一ニ關スル施設ニ付種々論議ヲ盡シタル結果政府ハ先ツ少クトモ所要原原種ノ十分ノ一ニ該當スル原蠶種ヲ製造シテ道府縣ニ配付シ漸次製造高ヲ増加シ結局強制的ニ全國ノ統一ヲ行フヘキコトヲ決議シタリ

政府ハ右決議ニ基キ明治四十四年原蠶種製造所(大正三年蠶業試驗場ト改稱)ヲ設置シ優良蠶品種ノ選出育成ニ努ムルト共ニ原蠶種ノ集造配付ヲ為スコト、ナシ爾來逐年國蠶系品種ノ普及ヲ見ルニ至リタルモ原蠶種ノ配付ハ希望ニ依リ之ヲ行ヒ強制スルモノニ非ラサルヲ以テ其ノ間種々ノ商

策行ハレ所期ノ目的ヲ達スルニ遺憾ノ點尠カラズ是ヲ以テ
大正九年及同十年地方蠶絲業主任官協議會ニ於テ原蠶種國
營ノ必要ヲ決議シ又同十一年蠶絲業同業組合中央會第七回
總會ニ於テモ本問題ニ付論議セラル、所アリタルモ其ノ後
國蠶系品種ノ普及ニ伴ヒ蠶品種モ逐次整理セラレ品種數漸
ク減少スルノ趨勢ヲ示シタルヲ以テ自然本問題ニ關スル論
議要望モ一時其ノ聲ヲ濤ムルニ至レリ然ルニ斯クノ如ク蠶
品種ノ改良ニ依ル效果ノ冷ク認識セラル、ニ至リタルト共
ニ一面蠶品種改良ニ關スル一般ノ興味ヲ喚起シ競ウテ新品
種ノ選出育成ヲ試ミムトスル狀勢ヲ示シ且此ノ氣運ニ乘シ
蠶種製造者ハ營業上ノ商策ヨリ益ニ新品種ノ製造ヲ企テ製
絲業者亦獨自ノ品種ノ蠶種ヲ製造シテ之ニ依リ原料繭ノ統
一ト特約組合ノ操縦トニ資セムトシ此等ノ原因ニ依リ近年
遠ニ蠶品種ヲ増加シ多種雜駁殆ト拾收スヘカラサルノ狀態

ヲ惹起シタリ即チ昭和元年ニハ原蠶種ノ品種數三百九十種
ナリシモノ昭和五年ニハ八百五十五種ニ達シ同七年ニハ稍
整理ノ緒ニ就キタリト雖尚五百九十二種ノ多キヲ算スルノ
狀況ニ在リ又一面輓近世界經濟事情ノ變遷ニ依リ我蠶絲業
ハ深刻ナル打撃ヲ蒙リ之カ難局打開ノ策トシテハ蠶絲業ノ
統制ヲ圖リ斯業ノ根本的立直ヲ漸行スルノ外途ナキヲ痛感
セラル、ニ至リ先ツ以テ製絲業ノ統制ヲ圖ル爲メ製絲業法ノ
制定ヲ見タルカ更ニ進ムテ蠶絲業ノ根源ヲ爲ス蠶種製造業
ニ付テモ之ヲ統制シ蠶品種ノ改良統一ヲ圖ルト共ニ必要ニ
應シ生産ノ調節ヲ爲シ得ヘキ制度ノ樹立ヲ必要トセラル、
ニ至レリ即チ昭和六年三月第五十九回帝國議會衆議院ニ於
テ原蠶種國營ニ關スル建議案ヲ採擇シ次テ同年十月農林審
議會ニ於テ政府ノ諮問ニ對シ蠶種管理制度ニ關シ審議スル
所下リ又同年十二月蠶絲業同業組合中央會第二十回總會ニ

於テ同問題ヲ審議シ其ノ要項ヲ議決シタリ其ノ後昭和七年一月地方蠶業試驗場長協議會及同年四月地方蠶絲業主任官協議會等ニ於テモ原蠶種國營問題論議セラレ同年六月第六十二回帝國議會衆議院ニ於テ本問題ニ關聯スル蠶絲業國家統制ニ關スル建議アリ同年八月第六十三回帝國議會衆議院ニ胎中榊右衛門外ニ氏ヨリ原蠶種國營法案ヲ提出セラレタルモ審議未了ニ終レリ而シテ同議會ニ於テ製絲業法案審議ニ際シ衆議院ニ於テハ原蠶種國家統制其ノ他ニ關スル法律案ヲ次期議會ニ提出スヘキ要望ヲ附帶決議シ又貴族院ニ於テハ原蠶種ノ國家管理案ニ關シ日本中央蠶絲會ニ諮問スヘキ旨ノ希望アリタルニ依リ同年九月政府ハ日本中央蠶絲會ニ對シ左ノ原蠶種管理要項ヲ示シ之ニ對スル意見ヲ求メタリ

原蠶種管理要項

- 一 政府ハ蠶品種ノ統一ヲ圖ル爲原蠶種ノ管理ヲ爲スコト
- 二 原原種ハ國ノ原蠶種製造所ニ於テ製造シ之ヲ道府縣又ハ第四ノ許可ヲ受ケタル蠶種製造者ニ配付スルコト
原原種ノ品種ハ蠶品種委員會ニ諮問シ之ヲ決定スルコト
- 三 原蠶種ハ道府縣ニ於テ製造シ之ヲ蠶種製造者ニ配付スルコト
- 四 蠶種製造者ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ自家用原蠶種ノ製造ヲ爲シ得ルコト
- 五 蠶種ノ移輸入又ハ移輸出ハ行政官廳ノ許可ヲ要スルコト
- 六 農林大臣ハ蠶種製造者ニ對シ蠶種製造業ノ統制上必要ナル命令ヲ發シ得ルコト
- 七 國ハ道府縣ノ原蠶種製造ニ要スル設備ノ費用ニ對シ補助

助金ヲ交付スルコト

日本中央蠶絲會ニ於テハ右ニ關シ同年十二月同會第二再總會ニ於テ審議ノ結果左ノ答申ヲ爲セリ

一 政府ハ蠶品種ノ統一ヲ圖ル爲原蠶種ノ管理ヲ爲スコト
二 原原種ハ國ノ原蠶種製造所ニ於テ製造シ之ヲ道府縣原蠶種製造所又ハ自家用ニ限リ蠶種製造者ノ希望ニヨリ配付スルコト但シ複製ヲ許サス

三 原原種ノ品種ハ蠶品種委員會ニ諮問シ之ヲ決定スルコト

民間ヨリ選出スル蠶品種委員會ノ委員ハ養蠶、蠶種及製絲ノ各業者ヨリ均等ニ選出スルコト

四 道府縣原蠶種製造所ハ原蠶種ヲ製造シ之ヲ蠶種製造者ノ希望ニ依リ配付ス

五 蠶種ノ移輸入又ハ移輸出ハ行政官廳ノ許可ヲ要スルコト

ト

六 國ハ道府縣ノ原蠶種製造ニ要スル設備及製造ノ費用ニ對シ補助金ヲ交付スルコト

七 民間ニ於ケル蠶品種ニ關スル調査研究助長ノ途ヲ啓ク
タメ政府ハ左ノ方法ヲ講スルコト

(イ) 民間ノ優良品種ハ蠶品種委員會ノ議ヲ經テ國ノ品種トシテ採用スルコト

(ロ) 前項ノ場合ハ相當價格ヲ以テ買上クルコト

附帶事項

一 政府ハ本事業施行ノタメ養蠶業者ヲシテ遊作ナカラシムルト共ニ蠶種不足ニ陥ラシメサルコト

二 政府ハ本事業有終ノ目的ヲ達成スルタメ養蠶實行組合

ニ指導員設置ノ方法ヲ講スルコト

次テ昭和八年三月胎中楠右衛門、加藤知正兩氏ハ原蠶種國

家管理法案ヲ第六十四回帝國議會衆議院ニ提出シ同院ニ於テハ之ヲ審議ノ結果可決セラレタルモ貴院ニ於テ審議未了トナレリ又同年四月地方蠶絲業關係協議會ニ於テ本問題ニ付論議セラレ之カ實現方ヲ答申及決議スル所アリタリ

一 原蠶種ノ國家管理ヲ必要トスル理由

現時我國ニ於ケル蠶ノ品種ハ其ノ數六百種ニ達セムトシ頗ル雜駁ヲ極ムルヲ以テ之ニ依リ生産セラル、繭ノ品質モ亦從テ區々不齊ナルヲ免レス而シテ此ノ情勢ヲ誘致シタル原因ヲ探究スレハ養蠶者ハ蟲質強健ニシテ收繭量ノ多キヲ望ミ製絲業者ハ絲量豊富ニシテ絲質良好ナルヲ欲シ蠶品種ニ對スル兩者ノ利害自ラ岐カル、ヲ以テ蠶種製造者ハ此等異リタル要望ニ迎合セムカ爲苦心シ獨自雜多ノ品種ヲ用ヒテ

蠶種ノ製造ヲ行ヒタル結果ニ外ナラス而カモ此等多數品種ノ中ニハ蟲性繭質共ニ劣リ養蠶製絲孰レヨリ見ルモ好マシカラサルモノ蓋シ鮮少ナラサルナリ

我國蠶絲業ハ最近ニ至ル迄海外主トシテ米國ニ於ケル生絲需要ノ増加ニ刺戟セラレテ發達シ之カ爲專ラ産額ヲ増加シテ其ノ需要ヲ充足スルニ躬々タルノ實情ニ在リタルカ近年ニ至リテハ海外機業ノ進歩ニ依リ優良齊一ナル生絲ヲ愈々望セラル、ニ至リタルト共ニ一面人造絹絲工業ノ異常ナル躍進ハ我生絲貿易ヲ少カラズ脅威スルニ至リタルヲ以テ今後ハ益々生絲品位ノ向上ト生産費ノ低下トニ專念セサルハカラサルハ論ヲ俟タサル所ナリ然ルニ生絲品位ノ優劣ハ原料繭ノ如何ニ依リテ左右セラル、所多キノミナラス生絲原價、約八割ハ原料繭ノ價額ナルヲ以テ原料繭ヲ改良シ其ノ生産費ヲ低下セシムルコトハ畢竟生絲品位ノ向上ト生産

費ノ低下トニ裨益スル所甚大ナルカ故ニ今後我蠶絲業ノ更
生ヲ策スルニハ原料繭ノ改良統一ヲ基調トセサルヘカラス
而シテ産繭ノ品質向上ハ蠶品種ノ改良ニ依リテ捷徑トシ繭
質ノ均齊ハ蠶品種ノ統一ニ俟タサルヘカラス現ニ蠶品種ノ
改良ニ依リ蠶作ノ安定ト繭質ノ向上トニ顯著ナル進境ヲ示
シタルコトハ周知ノ事實ナルヲ以テ今後蠶品種ノ改良ニ一
層ノ力ヲ致スト共ニ之カ普及統一ニ關シ適切ナル施設ヲ講
スルヲ緊要トス

原蠶種國家管理ハ斯カル問題ヲ解決スヘキ最善ノ方策ニシ
テ國家カ特ニ強制力ヲ以テ之ヲ管理セムトスルノ所以ハ原
原種ノ製造ヲ民間當業者ヲシテ自由ニ之ヲ行ハシムムカ到
底現状ヲ打開シ品種ノ整理統一ヲ期スルコト困難ナルノミ
ナラス斯業ノ統制ヲ必要トスル場合ニ於テ徹底セル國策ノ
遂行ヲ期シ難キ憾アリ即チ國家カ原原種ノ製造ヲ專行シ原

蠶種ノ製造ハ之ヲ國家管理ノ下ニ於テ道府縣又ハ許可ヲ受
ケタル蠶種製造者ニ行ハシメ之ヲ蠶種製造者ニ配付シ普
通蠶種ノ製造ヲ爲サシムルトセハ現存スル雑多劣等ナル蠶
品種ハ悉ク淘汰整理セラレ養蠶者ハ何等ノ疑惑ナク蠶性強
健絲質優良ナル蠶兒ノ飼育ヲ行ヒ得ヘク作柄ノ安定ト繭生
産費ノ低下トニ依リ養蠶經營ノ向上ニ寄與スル所甚大ナル
ハ勿論生絲品位ノ向上齊一ト生絲原價ノ引下トニ依リ製絲
經營ハ著シク合理化セラルヘク且無謀ナル競争ノ弊ヲ矯メ
蠶種製造業ノ經營改善ニ顯著ナル效果ヲ齎スヘキヲ以テ原
蠶種ヲ國家ニ於テ管理スルコトハ斯業更生上喫緊ノ要諦ト
謂ハサルヘカラス殊ニ蠶絲業ノ基礎ヲ危クスル虞アル場合
ニ於テハ製絲業ノ統制ト相俟テ蠶種製造業ノ統制ヲ圖リテ
コソ蠶絲業全般ノ統制ヲ完ウシ得ルモノナルヲ以テ之カ爲
ニモ國家管理ノ必要ハ敢テ贅言ヲ要セサル所ナリ

三、原蠶種國家管理ノ蠶絲業ニ及ボス效果

(イ) 養蠶者ニ對スル利益

現時蠶品種ハ其ノ數頗ル多ク雜駁ヲ極メ玉石混淆ノ状態ニ在ルノミナラス品種名ト其ノ實質一致セサルモノアルヲ以テ養蠶者ハ蠶種ノ購入ニ際シ其ノ選擇ニ迷ヒ且蠶品種ノ性狀明カナラサル為飼育上ニ齟齬ヲ來タスコト少カラス然ルニ原蠶種國家管理ノ實施ニ依リ之等ノ弊ヲ艾除シ蠶品種ノ統一向上ハ作柄ヲ安定シ繭質ヲ優良且齊一ナラシムルヲ以テ産繭處理上頗ル有利且自由トナルノミナラス蠶作ノ安定ト收繭ノ増加トニ依リ繭生産費ノ低下ヲ來タシ養蠶經營上享受スル利益少カラス

(ロ) 蠶種製造者ニ對スル利益

現今蠶種製造者ハ自己製造蠶種ノ販賣ニ焦慮スルノ結果

特異ノ品種ノ蠶種ヲ製造セムトシ他ヲ顧ル暇ナキノ狀況ニアレ共原蠶種國家管理ノ實現ニ伴ヒ原蠶種ノ製造ニ要シタル勞費ヲ省キ得ルノミナラス品種ノ選擇ト新奇ノ名稱ヲ逐フノ煩ナク普通蠶種ノ製造ニ專念シ得ルコトナルヲ以テ蠶種ノ實質向上ニ寄與スル所大ナリトス又蠶種製造ノ經營上ヨリ之ヲ觀レハ各々其ノ獨自ノ品種ニ依リ蠶種ノ製造ヲ為ス為ニ生スル種々ノ弊害ヲ除去シ蠶種ノ需給ヲ圓滑ナラシメ且品種ノ多數ナルカ為勢ヒ免レサル過剩蠶種ヲ著シク減少セシメ蠶種製造業ノ經營ヲ改善安定セシムルヲ得ヘシ

(ハ) 製絲業者ニ對スル利益

歐米發業ノ發達ニ伴ヒ優良生絲ノ要望セララル、コト益々切實ヲ加ヘツ、アルニモ拘ラス蠶品種雜駁ナル為製絲業者ハ原料繭ノ不齊ニ苦ミツ、アルノ現況ナルモ原蠶種國

家管理ノ實現ニ伴ヒ蠶品種統一セラレ優良均齊ナル原料ヲ廣ク且自由ニ購入シ得ラル、コト、ナリ原料繭ノ仕入上頗ル便宜ヲ得ラル、ノミナラス乾繭煮繭ノ程度ヲ均一適當ナラシメ繭能率ヲ増進シ得ルヲ以テ生絲品位ノ向上ト生絲生産費ノ低減トニ資スルコト頗ル多シ

(二) 蠶絲業統制上ノ利益

原蠶種國家管理ヲ實施シ原原種ノ製造ヲ國家ノ專行トスル場合ニ於テハ養蠶者ノ飼育スル蠶ノ品種ハ容易ニ之ヲ統制シ得ルヲ以テ養蠶經營上ノ改善ヲ指導スル上ニ於テ其ノ徹底ヲ期シ得ルノミナラス今後蠶繭類ノ新規利用ノ研究ノ進捗ニ伴ヒ産繭ノ品質ニ何等カノ變革ヲ必要トスルニ至リタルトキハ本制度ノ運用ニ依リ立處ニ之カ轉向ヲ敢行シ得ラルヘク又一朝生産調節ヲ必要トスルカ如キ場合ニ於テハ本施設ノ發動ニ依リ蠶種製造業ノ統制ヲ圖

リ生産ノ根源タル蠶種ニ付適切ノ措置ヲ講シ得ルノ用意ト權限トヲ茲ニ保有シ得ルモノトス

右ニ述ヘタルカ如ク蠶品種ノ改良ハ養蠶者ニ採リテハ蠶作ノ安定ト繭質ノ向上トヲ、蠶種製造者ニ採リテハ經營ノ改善ト業務ノ堅實トヲ、又製絲業者ニ採リテハ製絲能率ノ増進ト生絲品位ノ向上トヲ圖リ得ラル經濟上莫大ナル利益ヲ享受シ得ヘシ即チ今後新品種ノ育成ト優良品種ノ普及トニ努ムルトキハ繭百匁ノ絲量現在ノ全國平均春蠶十二匁夏秋蠶十一匁ヲ夫々十五匁及十四匁トナシ得ルノミナラス同功繭歩合ヲ減シ且解紵ヲ良好ナラシメテ絲絲時間ヲ短縮スルニトニ依リ年額一億三千九百萬圓ノ利益ヲ擧ゲ得ルハ

見込ナリ

四 原蠶種國家管理計畫ノ概要

蠶品種ノ改良統一ヲ圖リ且斯業ノ統制ニ資スル爲原蠶種管
理ニ關スル法律ヲ制定シ政府ニ於テ原蠶種ノ製造ヲ管理ス
ムトス其ノ要項次ノ如シ

- 一、原原種ハ國ニ於テ製造シ之ヲ道府縣又ハ第四號ノ郡若クハ
受ケタル蠶種製造者ニ配付スルコト
- 二、道府縣ハ國ノ配付シタル原原種ヲ用ヒテ原種ヲ製造シ之
ヲ蠶種製造者ニ配付スルコト
- 三、蠶種製造者ハ第四號ノ許可ヲ受ケタル者ヲ除クノ外道府
縣ノ配付シタル原種ヲ用フルニ非サレハ普通蠶種ノ製造
ヲ爲シ得サルコト
- 四、蠶種製造者ハ農林大臣ノ許可ヲ受ケ國ヨリ直接原原種ノ
配付ヲ受ケ自家用原種ノ製造ヲ爲シ得ルコト
- 五、農林大臣ハ蠶種製造者ニ對シ蠶種ノ統制上必要ナル命令
ヲ發シ得ルコト

- 六、蠶種ノ移輸入又ハ移輸出ハ農林大臣ノ許可ヲ要スルコト
- 七、民間ノ品種ニシテ優良ナルモノハ國ノ品種トシテ採用シ
得ルコト

而シテ本施設費施ノ爲國ニ於テハ昭和九年度以降四箇年間
ニ蠶業試驗場ノ蠶種製造配付設備ヲ増設擴張スルモノトシ
其ノ間ハ從來通り希望配付ヲ行ヒ其ノ數量ハ設備ノ擴充ニ
伴ヒ漸次増加シ設備ノ完成ト共ニ所要額全額ノ製造配付ヲ
爲シ得ルニ至リ品種ノ強制的整理統一ヲ行ハムトス
又一面之ニ應シテ道府縣ノ原種製造配付設備ヲ擴張整備セ
シムル爲後年度ニ於テ國庫ヨリ設備費ニ對シ相當ノ補助金
ヲ交付シ之ヲ完成ヲ期セムトス

五、蠶種ニ關スル統計

(一) 蠶種製造者數及蠶種製造額

年 度	原 蠶 種		原 蠶 種		計
	製造者數	製造額	製造者數	製造額	
昭和三年	三,九八一	七,一八三	一,九一五	八,九三六	九,一四一
同 四 年	四,〇二五	八,九九七	七,〇二八	八,五八七	八,七四三
同 五 年	五,四九四	六,八三七	六,八八五	九,一三三	九,四三六
同 六 年	五,一三五	六,二二九	六,二九九	七,九一〇	八,一八三
同 七 年	四,三五三	五,五八九	五,六二七	二,一九八	六,九五二

(二) 蠶種製造者製造原蠶種品種數

年 度	純粹種及同遠親	交 雜 種	計
大正十二年	四〇四	二〇二	六〇六
同十三年	二八八	一一四	四〇二
同十四年	三二五	一〇七	四三二
同十五年	三〇二	八八	三九〇
昭和二年	三三四	七四	四〇八
同三年	四〇二	六〇	四六二
同四年	五八九	三六	六二五
同五年	八二四	三一	八五五
同六年	七四二	七	七四九
同七年	五八九	三	五九二

(一) 國蠶系地方蠶業試驗場系其ノ他別蠶種製造額割合

年 度	原 種			普 通			蠶 種		
	國蠶系	地方蠶業試驗場系	其ノ他	國蠶系	地方蠶業試驗場系	其ノ他	國蠶系	地方蠶業試驗場系	其ノ他
大正十二年	五八・七%	一・六%	一・九%	四八・六%	七・九%	三・〇%	一三・七%	一・〇%	一・〇%
同十三年	六〇・一%	一・七%	一・二%	五〇・〇%	一・三%	一・二%	一三・二%	一・〇%	一・〇%
同十四年	五六・三%	一・六%	一・一%	四六・九%	一・七%	一・三%	一三・二%	一・〇%	一・〇%
同十五年	五五・六%	一・八%	一・五%	四四・八%	一・八%	一・三%	一三・〇%	一・〇%	一・〇%
昭和二年	五九・三%	一・四%	一・四%	四七・六%	一・九%	一・六%	一五・二%	一・〇%	一・〇%
同三年	五六・八%	一・三%	一・二%	四六・四%	一・六%	一・三%	一三・八%	一・〇%	一・〇%
同四年	四七・九%	一・六%	一・一%	四二・三%	一・四%	一・二%	一九・〇%	一・〇%	一・〇%
同五年	四六・〇%	一・五%	一・一%	三〇・六%	一・三%	一・一%	一八・七%	一・〇%	一・〇%
同六年	六一・七%	九・五%	二・八%	五一・〇%	七・三%	二・四%	二四・七%	一・〇%	一・〇%
同七年	六六・三%	六・五%	二・七%	五八・四%	四・一%	一・一%	二六・四%	一・〇%	一・〇%

(四) 普通蠶種製造用原蠶種掃立數量及製造者別原蠶種製造額

年度	普通蠶種製造用原蠶種掃立數量		原蠶種製造者別原蠶種製造額		計額
	掃立數量	原蠶種製造者	地方振興課	製造者	
昭和三年	一四四六一七五	一〇一五九一八	五四〇一五	一一四四二	二四、五七二、〇八七
同四年	一四、五三二、七九四	一九、九八二、四〇一	五、三九八、七〇三	一三、五六〇	二五、三九四、六六四
同五年	一三、〇六七、一六	二九、八三六、一四三	四、五九四、六〇七	一四、二七〇	三四、四四五、〇二〇
同六年	一一、八九八、一三七	二六、五〇〇、五八四	四、二六八、七九七	一八、五九三	三〇、七八七、九七三
同七年	一一、三八四、八八九	二六、九八二、八六三	五、四八二、八七九	一四、一八二	二八、四七九、九二四

備考

昭和五年度以降ニ於ケル普通蠶種製造用原蠶種掃立數量ハ原蠶種掃立總數ニ付原蠶種製造額及普通蠶種製造額ヨリ推定算出セリ

(五) 蠶種製造額及掃立額比較

年度	前年發種額		同上年檢査額		掃立數量	過剩額	同上年檢査額ニ對スル割合
	製	造	合	格			
昭和三年	八七七、五五六、八	八、九四九、九	一、〇五三、三	一、八八九、〇	一、二一五、四	三、九	—
同四年	九一四、八四三、九	九、〇二一、八	三、三二二、四	一九一、五二、八	一、三〇七、一	四、〇	六
同五年	八七八七、三三〇	八、六一八、五八	三、〇七八、〇	一八五、二七、〇	一、二二五、三	三、九	八
同六年	九四三、六六七、三	九、〇九一、五八	三、三四九、九	一八一、三四、〇	一、四三三、五	四、四	二
同七年	八一八、一五八、九	七、九四三、五	二、八三六、九	一七、七九三、三	一、〇五七、六	三、七	三

備考

蠶種一枚ハ二十八蛾分ナリ

(六) 農林省蠶業試驗場原蠶種配付品種數及配付數量

年 度	春 配		夏 配		秋 配		計
	種	數	種	數	種	數	
昭 和 三 年	八	一五	一	一	八	八	二〇
同 四 年	二	一九	一	一	〇	〇	二七
同 五 年	一	一八	一	一	〇	〇	二九
同 六 年	二	二〇	一	一	〇	〇	二九
同 七 年	九	一	一	一	〇	〇	三三
計	二〇	七〇	四	四	〇	〇	七六

(七) 地方蠶業試驗場原蠶種配付品種數

年 度	品 種		同 上		計
	種	數	種	數	
昭 和 三 年	四	一	三	一	一〇
同 四 年	七	一	七	一	一〇
同 五 年	七	一	七	一	一〇
同 六 年	五	一	五	一	一〇
同 七 年	三	一	三	一	一〇
計	二六	五	二六	五	三六

(八) 地方蠶業試験場系統別原蠶種配付數量

年度	配付數量			同上割合		
	國産系	地方蠶業試験場系	計	國産系	地方蠶業試験場系	計
昭和三年	二七五五 ^七 _四	八一四八 ^四 _四	三、五七〇 ^四 _八	七七・一	二二・八	一〇〇・〇
同 四年	二、六三三 ^三 _七	一、〇六二 ^六 _八	三、六九五 ^九 _六	七一・二	二八・八	一〇〇・〇
同 五年	二、二七七 ^七 _九	八四四 ^四 _九	三、一二二 ^二 _一	七三・〇	二七・〇	一〇〇・〇
同 六年	二、四四六 ^六 _七	三五五 ^五 _七	二、八〇一 ^一 _四	八七・三	一二・七	一〇〇・〇
同 七年	三、五〇三 ^三 _三	四〇八 ^八 _八	三、九一〇 ^〇 _四	八九・五	一〇・五	一〇〇・〇

(九) 蠶種製造者原蠶種所要額及地方蠶業試験場原蠶種配付數量

年度	原蠶種所要額	原蠶種配付數量	對原蠶種所要額配付率(%)
同 四年	一三三六 ^七 _八	三六八五 ^九 _六	二七・六
同 五年	一一二二 ^九 _九	三一三三 ^六 _一	二七・五
同 六年	一一六七 ^二 _九	二八〇一 ^一 _七	二四・〇
同 七年	一一七 ^七 _四	三九一 ^一 _〇	三三・二

備考

一 蠶種製造者ノ原蠶種所要額ハ翌年度ニ於テ掃立テタル原蠶種總額ヨリ原蠶種ノ製造配付ヲ爲ササル大政府及佐賀縣(昭和七年度ハ大政府ノミ)ノ原蠶種掃立蠶數ヲ控除シタル蠶數ナリ

昭和七年度ノ原蠶種所專額（昭和八年度掃立分）ハ未詳ニ付前年度ノ數字ニ佐賀縣ノ掃立蠶額ヲ加ヘタル數字ヲ用ヒタリ

(一) 蠶種移輸入數量

一 移入數量

年度	臺灣	朝鮮	神戶	東京府 八丈島	東京府 三宅島	東京府 三原島	計
昭和三年	一〇九五五	三九八三	四九五七	一	一	一	九〇五〇
同四年	大五〇三三六	一六八六〇	一〇九一六	六七四六	一〇七六三	一	一八七三三
同五年	三六五五三三	八〇〇八	一	一	一	一	三七三五一
同六年	一九〇九〇	四〇七七二	一	一	一	一	五九八六二
同七年	一六六一〇五	二六〇九二	一	一	一	一	四二八七三

二 輸入數量

年度	伊太利	佛蘭西	支那	蘇州	計
昭和三年	一八四五二八五	二三五五	二〇	一	一八四七六六〇
同四年	一七八九三八二	一	二五〇七	一	一七九一八八九
同五年	一六七七〇六〇	三〇	八二二	一	一六七七九一一
同六年	二〇八五三〇	三〇	二三四	一	二〇八七九四
同七年	七二〇	一	一	一〇四	八二四